

コラム52:煙草のけむり (2016年7月)

一つの商品のイメージというのが、時代とともに変わってゆく、ということはよくあります。一番の変貌を遂げたのは何と言っても「電話」だと思いますが、タバコ(煙草)という商品もずい分と変わってしまったと思いますね。私自身が今は煙草をやりませんし、まわりにヘビースモーカーと言える人がいないので、現在のイメージはよくわかりません。しかし、あれだけ「健康被害」が言われ、「喫煙場所」も限られ、あんなにも「高価格」になって、「悪のイメージ」が固定しているにもかかわらず、<よく頑張って吸っているな>という感じで見ていますね。

しかし、60年代から70年代、私の若かりし頃で、今から50年近くも時代を遡りますが、タバコはそんなマイナーなイメージばかりの商品ではなかったのですよ。一言でいうなら、タバコというのは酒と並んで、「大人の世界」を象徴するものであったと思うのです。ここではそのことを証明するために、まずはその時代の「流行歌」(はやりうた)を取り上げてみましょうか。「コラム41:戦後歌謡」の中で詳しく述べていますが、その時代に流行った歌には、その時代に生きていた人の心が反映していると思うんですよ。

昭和30年代(1955年～)から40年代(1965～1974)にかけての主な流行歌の歌詞を調べてみました。(注1)歌詞の中にタバコに関する言葉が使われているか、ということなのですが、意外なことに、30年代にはほとんどありませんでした。昭和40年代に入って、頻繁に登場してくるのです。もしかしたら、この頃から「煙草＝大人の世界」のイメージが定着してきたのかもしれないですね。

♪～ベッドで煙草を 吸わないで 私を好きなら 火を消して
瞳をとじて やさしい夢を～♪

(昭和41年 '66 ベッドで煙草を吸わないで)

これは煙草を使って、大人の男女関係を描いた最初の流行歌ではないかと思いますね。この歌では「ベッドで煙草～」のフレーズが歌詞の中に6回も使われているのです。

煙草が男女の性的関係を露骨に想像させているゆえに、この歌は「話題」にはなりましたが、ヒット曲には至らなかったように思います。煙草を使った一番のヒット曲はこれではないでしょうか。

♪～あなたの好きな煙草の香り ヨコハマ
ブルー・ライト・ヨコハマ 二人の世界いつまでも～♪
(昭和43年 '68 ブルー・ライト・ヨコハマ)

これは私の大好きな曲ですね。「いしだあゆみ」の何気ない感じの、それでいて、のびやかでシっとりとした歌唱がいいですね。この後に、やはりヨコハマを舞台にした流行歌(はやりうた)がありました。



♪～よこはま たそがれ ホテルの小部屋
くちづけ 残り香 煙草のけむり ブルース 口笛 女の涙～♪
(昭和46年 '71 よこはま・たそがれ)

この歌詞はスゴイですね。見事に「大人の世界」と「男と女」を表現しています。作詞は山口洋子、彼女はかなりの「愛煙家」とみえて、ずいぶんと煙草を歌に使用しています。彼女の作った次の歌では、より具体的な男女関係がわかりますね。

♪～折れた煙草の 吸いがらで あなたの嘘が わかるのよ
誰かいい女(ひと) できたのね できたのね～
(昭和49年 '74 うそ)

同じ年に彼女の作詞で出ている「理由」(わけ)にも煙草という言葉が使用され、やはり「不倫」と「別れ」という状況設定の中で、歌詞に「煙草」が使われています。作者は違いますが、これも菅原洋一がしっかりと聞かせてくれた「いい歌」でしたね。

♪～最後のタバコに 火をつけましょう

曲がったネクタイ 直させてね～♪

(昭和45年 '70 今日でお別れ)

この歌の二番の最初に出てくるこのフレーズ。別れる男の吸うタバコに火をつける時の、「女心」というのは何だろうと思うのです。このことが私は気になるんですよ。男と女の「別れの儀式」に煙草が使われるということ、この歌で知りました。そしてタバコの歌の決定版は、これですね。

♪～こんな日は あの人の まねをして

けむたそうな 顔をして 煙草をすうわ

そういえば いたずらに 煙草をすうと

やめろよと 取りあげてくれたっけ

(昭和50年 '75 思い出まくら)

タバコの演出する、このような形の男女関係を描いた歌詞の歌は、今の時代には出てこないでしょうね。この時代のタバコというのは、「健康を害する」商品であると同時に、男と女が付き合うための「小道具」でもあったのです。男は女の吸っている煙草を取り上げても、決してタバコをいけない物として否定しているわけではありません。「おまえの体を大事にしろよ」と言っているのであり、多分彼自身もタバコを吸っていると思いますね。小坂恭子が作詞作曲して唄ったこの歌は、タバコを通じた男と女の「つながり」、そして「別れ」をうまく表現しています。

今でもそうでしょうが、中学から高校では、「タバコ＝不良」という観念が植え付けられて、タバコを吸うのは「ワル」というレッテルを張られて、生徒指導の上で絶対的な規制対象とされたのです。校舎の陰でタバコを吸う「勇気」もなく、ワルになって反抗するほどの「根性」もなく、一応外面だけは「まじめな生徒」として、私は学校生活を過ごしていたように思います。その抑圧からか、高校を出てから、友人三人と店の全銘柄のタバコを買ってきて、一晩中吸いまくったなどという「バカなこと」もしましたね。



私のタバコは、好きで吸うというより、まわりの友人たちが吸うので、こちらも負けずに「吹かしている」という感じの、「付き合いタバコ」でしたね。「煙草が美味いなあ」と感じたことはありません。酒を飲みつつタバコを吹かしたら、ヒドク悪酔いをしたり、結婚したら妻が嫌がったり、などということがあり、だんだん喫煙が減ってきたのです。「健康を害するから」とかいった理由で、「決意してやめた」というわけではなく、いつのまにか吸わなくなっていた、というのが私のタバコです。酒を止めることは出来ませんが、煙草には全く執着がなかったですね。

タバコを心から愛していた友人がいました。「コラム40:ネコの涙」にも登場している「谷村」という人物です。中学も高校も違ったのですが、奇妙な縁で知り合い、同じ頃に広島から上京し、よく酒を飲んで語り合いました。彼は「ショートホープ」というタバコを、こだわって吸っていましたね。胸の内ポケットから、濃紺の小さな10本入り箱を取り出し、ポンと人差し指で叩いてふたを開ける。1本取出して口に咥え、ゆっくりとライターで火をつけ、煙をふかしながら少しうつむいて、軽く目を閉じる……温厚な彼らしく、静かに煙草を楽しんでいた仕草を、今でも思い出します。

この写真は、'72年に池袋東口にあった「清龍」という居酒屋で撮ったものです。前の私の写真も同じ場所、同じ頃ですね。彼はクラシック音楽、とりわけショパンを愛し、酔っ払うと「オーケストラの指揮者」のマネをして悦に入っていたものです。高校時代は文芸部にいて、「早熟な小説」をいくつか残していますが、それから後の彼の作品を読む機会は遂にありませんでした。阪神大震災のあった1995年に急逝、いろんな事情があって、私がそれを知ったのは彼が亡くなって一か月以上が経過していました。毎年墓に参りますが、それは「悔やみ」というより「感謝」の気持ちからですね。私は彼との付き合いの中で、「文学的なもの」を教わったと思います。もちろん彼が勧めたとか、教えてくれたという意味ではありません。そして、私と妻との出会いも、彼との付き合いがあって後の、「人のつながり」からなのです。その意味で、彼は私の人生の流れの中で、「キイパースン」と言えます。いつもゼニを持っていなかったですが、かたくなに自分の世界を守り、決して人の言うことを聴かない面もありましたね。成就することのなかった「作家志望」にして、「ショパンのバラード」と「ショートホープ」をこよなく愛する、心やさしき「頑固者」……そういうヤツでした。



<この節より突如として文体は 竹中労 <注2>のごとくになります>

1970年の春、孤影昂然(こうぜん)と郷関を出でて花のお江戸へ……要するに、地方都市の「広島」を脱出して、憧れの「東京」という大都会に、オイラは青雲を抱いてやってきた。上京した名目は大学入学、中央大学文学部哲学科社会学専攻課程というのが、オイラの入学したところだった。「文学的」でも、「哲学的」でもなかったが、高校の教師に報告すると、なぜか「キミらしい所へ行ったな」と言われたな。どうしてそんなワケノワカラン所に入ったのかって？理由は簡単、他に入学を許可してくれる所がなかったからサ。「マスコミ関係の仕事」につきたいなどと夢を抱いて、いわゆる「一流校」を受験したものの、如何せん学力不足でことごとく不合格。残ったのが、友人「谷村」の付き合いで受けた中大しかなかったという、ナサケナイ話なワケさ。

そうは言っても、せっかく入学を許可されたことだし、親も学資を出してくれ、板橋に4畳半6500円の安アパートも見つけ、ともかくは行って見なくてはならない。オイラは高校のときの学生服を着て、初登校することにした。ただ一人、地下鉄「御茶ノ水」駅を降り、神田駿河台を5分ほど下ると、我が中大の堂々たる「白門」。オイラはそこを入りかけた時に、ブッタマゲタヨ！いきなりヘルメットを被った大集団が中庭から襲いかかってきた！逃げ遅れて、門の側の刈込に倒れところをゲバ棒(太い角材のことだな)を振りかぶられた。「やられた！」と思ったら、「ア！キミ、イッパンガクセイですか？」と、棒を止めたのサ。何が「一般学生」だ！フザケルサ！今では信じられないような話だが、本当にあったことなんだ。

1967年の羽田事件あたりから過激化していた学生運動は、'69年1月の東大の安田講堂落城と入試中止以後は沈静化していたものの、学園紛争は70年安保を控えて再燃しつつあった。特に中大というのは「激戦校」であつたらしいナ。オイラが入った時も、入学式はなく、大学祭も学内のセクト対立とかで中止、学内では中庭で団交と称する集会が開かれ、文学部長を吊し上げる、などということをやっていたな。学内にはいたるところにタテカン(粉碎などというスローガンを書いた大きな看板のことだな)がおかれ、マイクを最大に上げたアジテーション(過激な演説のことだな)が鳴り響き、沢山のアジビラが舞っていた。前年までの騒然とした雰囲気、まだ残っていたんだ。サークル室のあった学生会館は、学生運動の温床になるということで、大学側によりロックアウトされたままで、下の



生協以外は使用不能状態。したがって、文科系のサークル活動は、大学近くの茶店でよくやったもんさ。当時の学生はやたらと理屈っぽくて、いつも茶店で議論をしていた。「論破」(ろんぱ)などという言葉が使われ、激しい口論が多かった。そういうこととは別に、そこでオイラは意外な光景を見たんだよ。

さすがにキャンパス内では見かけなかったが、マジメそうな女子学生が、茶店ではごく普通の感じで煙草を吹かしていたんだよ。オイラには、ショックだった。「タバコは不良が吸うもの」という固定概念が、刷り込まれているんだな。あの喫煙はどういう意味があったのだろう。「大人の女」、そして「自立した女」という主張、それに当時の大学にあった「反体制ムード」というのも影響したかもしれない。「男の言う通りにはならないよ」というツッパリのメッセージでもあったかもしれない。その頃の女子大生の喫煙率がどの程度だったのかは不明だが、今よりかなり高いと思うな。

入学式の代わりに行われた文学部全体の履修説明会、そこでオイラは一人の女子学生に目が止まる。何気なく羽織った、真っ赤なエナメルコートが目立っていた。こんなダサイ大学に、こんなイイ女がいていいのか、その時に思ったネ。そのあとで、偶然にも同じ専攻、同じクラスということがわかった時にはウレシカッタな。オイラはクラス名簿の作成をしたり、クラスで江の島ハイキングを企画したりした。要するに、目立つことで彼女に認められたかったんだな。

茶店で話す機会があった。I・Sさんは東京の人だった。有名都立高の出身だったな。さりげなく文学や政治の話をしていたが、オイラはついて行けなかった。さすがに都会の子は進んでいる、地方の高校を出たオイラとは別世界で生きている、という感じがした。彼女と二人で向かい合って話すと、何となく落ち着かなかった。そこでオイラはポケットから吸いなれていないタバコを、ぎごちなく取り出し、ハイライトをくわえた。すると彼女はサッとライターで火をつけてくれたんだ。それから自分のカバンから煙草を取り出し、自分も吸い始めたんだな。慣れた仕草だった。彼女の吹かす「煙草のけむり」がいい匂いだった……オイラその時に、コトンと恋に落ちてしまったわけサ。

オイラ、恋の道にオクテだった。中学、高校、と共学校であったから、それまで好きになった子がいなかったわけではなかったが、如何せん、「実戦経験」が皆無だったんだ。生の女性と交際したことがなかったから、恋愛というものに対する免疫性がないわけだ。ついでに白状するなら、オイラ恥ずかししながら、その時に「童貞」だった。こんな「ウブな田舎者」が、都会で育った「大人の女」と対等に付き合うのは所詮無理なワケさ。「失恋」というより、「子犬の恋」という感じで、何の進展もなく、いつのまにか終わっていたよ。その少し前に、彼女が左翼系のサークルに入っていることを知った。オイラが入っていたサークルとは対立関係にあったが、それほど気にはならなかったな。あまりサークル内のイデオロギーみたいなものに興味がなかったんだ。一年を過ぎた頃には、先輩の部会員とサークルの活動方針で対立、喧嘩して脱会ということになった。オイラは集団で活動することが苦手な「変人」、カッコよく言えば「一匹オオカミ」のタイプだったんだな。

中大に入って気づいたんだが、学生運動でもサークルでも、やたらと法学部が幅をきかせているんだ。要するに、看板学部ということもあって偏差値が高いワケさ。文学部にはオイラのように早慶を落した連中がきているんだが、法学部というのは全く違ったんだよ。連中は早慶に合格していて、それを振って中大に来ていたんだな。司法試験の合格者も、当時は東大よりもはるかに多かった。ので、天下国家を背負って立つような気概をもった「秀才」が多かったんだな。しかし、このことは他の学部の者にとって、決して愉快なことではないワケさ。バイトに行って、大学名をいうと、大抵聞いてくる。「法学部?」「いえ、ボクの場合は文学部です」するとあきらかに落胆の表情を浮かべて「ああ、そうなの」。オモシロいワケないさ。なんて「卑屈な答え方」かと、我ながら情けなくなり、同時に「イヤな大学に入ったな」と思ったな。

入りたかったわけではないし、「こんな所を出てもショウガナイワイ」などという気持ちもあって、次第に大学に行かなくなり、オイラは学外で行動することが多くなった。そのころ黒沢明(コラム43: 戦後歌謡 その3 注2参照)の映画をみて、「衝撃」を受けたんだな。それから、京橋にあった近代美術館フィルムセンターに毎日のように通って、古今東西の名作を見ていったんだよ。各地の名画座や自主上映、アテネ・フランセ、岩波ホールにもよく行った。映画とは関係ないが、東大で宇井純氏(注3)がやっていた公害原論に通ったのもこの頃だった。それから、やたらとバイトを始めたんだ。何故かって？ 目的は「日本脱出」、当時の若者に流行ってたんだよ。シベリア鉄道でヨーロッパに入り、皿洗いをしながら、世界を「無銭旅行」というのが。バイト先で海外へ行った連中の話を聞いて、なんとなく自分も行きたくなったというワケさ。そのころはまだ大学に籍があって、仕送りも受けていたんだから、「親不孝モン」だよ。



バイトの話に戻るんだが、ずいぶんいろいろやったな。日本橋郵便局の夜間の仕分作業から始まり、当時は築地にあった青果市場の配達係、交通量調査と日通の引越し、世論調査員や英会話教材のセールス、etc...ざっと数えても30種以上になるな。キャバレーのボーイ(コラム27:夜の赤坂 参照)とか、他には着物展示会場の設営作業というのもあるが、この話をすると、優に一編の小説になりそうなので、ここでは触れないでおこう。

「タチンボー」というのを知ってるか？ 漢字でどう書くのか知らないが、「立ちん坊」かもしれない。東京の高田馬場の駅近くで、当時は日雇い労務者を集めていたんだ。オイラはバイト先の友人からこの話を聞いて、行くようになった。駅を降りてすぐの所に男たちのたまり場があり、そこで立っていればいいんだ。すると、「手配師」と呼ばれる人集めの男が来て、仕事の内容場所と金額を言って廻るので、納得したら車に乗って現場に行くだけの話だ。名前も住所も聞かれない。おもしろいのは、地下足袋(じかたび)を履いて本職の格好をしていると、一日の賃金がザンク(麻雀用語で3900円のこと)、学生風だとニッパチ(2800円)だったことだな。時給350円相場の当時では破格の日当で、ヤバいけどゼニにはなったんだ。危ない現場もあって逃げ出したこともあったが、賃金の不払いに遭遇しなかったのは、運がよかったのかもしれないな。

そんなわけで、日当の高いのを選んでいろんなバイトをして、けっこうオイラは稼いでいた。にもかかわらず、「日本脱出」の資金は一向に溜まらなかった。なぜって、毎晩のように飲んでいたんだよ。要するに「本気」じゃなかったんだな。飲むのは、友人と三人位のことが多かった。メンバーは大抵は、前述の谷村氏と、同じ大学のY氏。彼とは同じサークルを、一緒に喧嘩して退会して以来の付き合いだった。彼は中大法科の「秀才」だったゆえ、司法試験の準備と称してバイトをしていなかったんだ。飲んだ後で勘定になると、「オレ？ ゼニねえよ」とツラッと一言。しょうがないから、大抵はこちらの支払いになった。彼に煙草について聞いたことがある。＜彼女＞がタバコに火をつけてくれる、という話だな。彼はスグに吐き捨てるように言ったよ。「オレはそういう、飲み屋の女みたいなのはイヤだな」その意味がオイラはよくわからなかった。居酒屋には行っても、女気のあるバーなどに行ったことはなかったんだ。ゼニもなかったが、不思議なくらい女とは縁がなく、モテなかったんだよ。その頃のオイラは、バイトをして、映画を見て、酒を飲んで、とにかく大都会 東京の街をヤタラと這い回って生きていたんだ。



……………あれから長い長い年月が流れ、今は2016年6月25日、土曜日の夜9時である。

私は高校時代からの友人の K 氏と、広島市の盛り場「流川」にある、行きつけのスタンドバー「U」にいる。店に入ると、長いカウンターと奥に丸テーブルの団体席がある。客の数は 15 名くらいか、繁盛店ゆえほぼ満席である。ママはカウンターの中から出て、私の隣に座っている。私とほぼ同世代か、もう少し若いかなという感じだ。

「ママ、ちょっと聞いてみるんじゃけど、男にタバコの火をつけてくれる女の子って、どう思う？」
(キッパリと)「普通の子はやらないよ。うちの店の子もやらないよね」
「昔、付き合っていた女の子が、タバコを吸う時にいつも火をつけてくれたんよ。こういうのは、好きとかいう気持ちはあるんじゃないか？」
(即座に)「それは多分関係ないと思う。他に火をつける子はおった？」
「そりゃおらんよ。ほいじゃが、どうして彼女は火をつけてくれたんじゃないか？」
「多分、その子、こういう所でバイトでもしとったんじゃないの」
(ちょっと間をおいて)「それか、そういうことを求める男の人と、付き合っていたんかもしれんねえ」
＜男の存在＞ですか……当時はそんなことを考えてもみなかったですよ。

＜煙草のけむり＞から、46 年もの年月が流れていた。あの頃の「東京放浪」の体験で、ゼニは貯まらなかったが、私は少しだけ逞しくなっていた。それから後、「都落ち」して広島に帰り、縁あって地元の花市場に勤務することになった。そこでは、大学や映画は何の役にも立たなかったが、「肉体労働」と、「酒の付き合い」の経験は大いに役立だった。それからまもなく、一人の女性との「出会い」があった。彼女は放送局に勤務しており、かつて私自身があこがれていた「マスコミ関係の仕事」であった。半年後に私達は結婚し、まもなく二人の男の子に恵まれた。いろいろと紆余曲折はあったものの、今は二人とも自立して、私たちの許を離れ、次の世代も生まれてきた。



今、私は、カミサンとワンちゃんの三人(?)暮らし。太陽の光を浴び、土の上を歩き、水に触れ、農業に精を出す毎日である。この世に生まれ、馬齢を重ねて 67 年になろうとしている。今までの長い人生で「出会い」をもち、お世話になった多くの人が他界されているが、まだ私の人生は終わっていない。幕が下りる前にやりたいことは一杯あるが、「予定表」はない……

「＜煙草のけむり＞の思い出をチイと書こう思うたら、ワシの＜青春物語＞みたいになってしもうた。ツマラン話に長々とつき合わせてスマンかったのう」

(注1)「戦後歌謡」のコラムの時と同様、「日本流行歌史」(社会思想社刊 '70 発行)を使用
ほかに「日本の詩情」(全音楽譜出版社 '77 発行)を参考にしました。

(注2)竹中 労(たけなか ろう)(1928～1991)
評論家 「女性自身」芸能担当ライター
「ケンカ竹中」の異名をもち「反骨のルポライター」といわれた
主な著書 「美空ひばり」「タレント帝国」「琉歌幻視行」「無頼と荊冠」他
※今回の文では、「無頼と荊冠」の「わが青春残侠传」の章を参考にしました。

(注3)宇井 純(うい じゅん)(1932～2006)
公害問題研究の第一人者 東大助手をへて沖縄大教授
水俣病告発に取り組んだ '70 より自主公開講座「公害原論」を開催